

根室空襲犠牲者追悼のつどい

7月15日（月）午前11時より、鳴海公園内平和祈念の碑前で「根室空襲犠牲者追悼のつどい」（共催：根室空襲研究会・ねむろ「九条の会」）が行われました。



写真中央＝追悼の言葉を述べる根室空襲研究会事務局長・ねむろ「九条の会」世話人の近藤敬幸さん 写真右は平和祈念の碑

「つどい」は、根室空襲研究会・桐澤国男さんの開会あいさつで始まり、田塚不二男根室市議会議員の来賓あいさつ、※「海行かば」独唱、近藤さんによる追悼の言葉と続きました。

近藤さんは、日本が戦争へと突き進んだ暗黒の歴史について語ったうえで、「やがて敗戦、現地で国内では多くの人命が失われた。人生の道半ば、無念にも終えさせられた人々の思いが積み上げられた結果、平和憲法を手にし、平和と民主主義を堪能するいま、なぜそれを壊そうとするのか。日本の歴史が語るごとく、およそ80年も戦争とは無縁であるいまこそ（それを）守る努力を重ねなければならぬ」と強調されました。また、根室空襲の際、市街地の空襲とともに海上の船舶が標的になったことにも触れられました。

参加者による献花の後、ねむろ「九条の会」共同代表・神忠志さんが閉会あいさつを行いました。

※「海行かば」について
「海行かば」は1937年、万葉集の伴家持作の長歌から採った詞に信時潔が作曲した楽曲です。当時の大日本帝国政府が国民精神総動員強調週間を制定した際のテーマ曲となっています。
1937年は日本による中国侵略が始まった年であり、時代背景、作曲された経緯などから、この曲はいわゆる「軍歌」と考えられますが、太平洋戦争時にラジオ放送の大本営発表が「玉砕」を伝える際にこの曲を放送したことから「鎮魂歌」としての印象が広まったようです。
今回のつどいで私（鈴木）は、近藤敬幸さんの依頼で「海行かば」を独唱しました。近藤さんは、「追悼の言葉」で触れられていましたが、この曲の解釈には諸説あるとしたうえで、今回は鎮魂歌としての演奏を求められました。私も尊敬する近藤さんの意をくみ演奏させていただきました。

（鈴木一彦）

市役所1階ふるさとギャラリーにて「根室空襲パネル展」が開催されています（26日まで）。あわせて、根室空襲関連図書展示コーナーも置かれています。戦争の悲惨さ、平和の尊さを学べる良い機会であると思います。多くの市民の皆さんがご来場されることを望みます。

党市議団は、一般質問等で、「非核平和都市」を宣言した根室市にふさわしい取り組みの実施を求めてきました。



根室空襲パネル展開催